A Dangerous Step!　危険な一歩
By トレーニング＆ボランティアスタッフ　クンニーワイ

　トゥントゥンはビルマ、カレン州、ランブウェ出身の 25 歳でこれまで農業をしていました。ある日、彼は食べ物を求めて森の中を歩いていて、そこで危険な一歩を踏んでしまったのです。地雷が爆発し彼の右足を吹き飛ばしてしまいました。
　村の人々が彼を見つけビルマの病院に運びました。爆発から病院へ搬送されるまで 3 時間。しかし残念ながらトゥントゥンは治療代を持ち合わせていなかったため、その病院から治療を拒否されました。そこで村人の 1 人が、タイのメソト病院で傷口を縫ってもらうことを勧めました。
　トゥントゥンは車で運ばれましたが、タイ・ビルマ国境のモエイ川は橋を渡れず川を渡らなくてはなりません。彼の村から国境は丸 1 日。彼はビルマの身分証明も橋の検問所で払うお金も無いので、国境の川をトラックタイヤのチューブを浮き輪にして渡りました。彼はメソト病院で 1 週間の治療を受け、メータオクリニックにやって来ました。
　現在トゥントゥンはメータオクリニックの義足工房にいます。彼は背が高く心優しくフレンドリーです。新しい人工の足でリハビリがしやすくなるのを心待ちにしています。彼がここに来てからもう 2 週間。身の回りの世話をしてくれている妻と 7 歳の子どもとともに滞在しています。
　トゥントゥンは落ち込んだ顔をしていました。
「足を一本なくしてしまった今、農民としてどうやって家族を支えていいか分からない。前と同じように働くことはできない。」
　彼は子どもを学校に行かせてやりたいのです。
　しかし、わずかな土地しか持たない彼の仕事は厳しいものです。土地の一部はビルマ軍によって統制され、ビルマ兵は頻繁にやってきては食料や鶏を奪っていきます。そのため彼は十分な収入を得る事が難しく、日雇い労働者としても働いていたのです。
　彼はクリニックのスタッフと仲がよく、スタッフに話します。
「ここのスタッフはとてもフレンドリーで辛抱強い。ここに来てよかった。メータオクリニックは治療だけでなく、食事も出してくれる。」
　トゥントゥンは義足ができれば村に帰って仕事を再開します。彼は精一杯働いて子どもを学校にやれることを夢見ています。

A Worried Mother　心配を抱える母
By 小児外来臨床スーパーバイザー、ポーワー

　スーはビルマ、ミャワディー近郊の小さな村に住んでいました。2 人の息子と 1 人の娘の 3 人を育てています。夫は酒飲みで,家族の事は顧みず毎日酔いつぶれるまで飲み続けていました。スーは毎日森に出かけては、野菜や果物を集め、時にはまき木を拾っては食費の足しに売っていました。
　メータオクリニックで治療を受けた村人の話から、スーはメータオクリニックのことを知っていました。しか

しどのように行くのかは知らず、そこまでいく交通費もありませんでした。

しかし彼女は意を決意し、近所に住む人にお金を借りました。翌朝、早起きした彼女は娘を連れて家をでました。ミャワディーまでは歩いて 20 分。込み合う国境の川岸でタクシーをつかまえてメータオクリニックに向かいました。私が娘を連れたスーに会った時、彼女には不安と疲労が漂っていました。彼女はやや背が高く、やせて黒い肩までの髪でした。娘はやせて弱っていました。

スーは何をしていいやら分からずに立ち尽くし、あたりを見回していました。彼女は私に娘の病気の事を話しました。私は彼女を中に招きいれ座って落ち着けました。

娘の事を尋ねると、その子は産まれてからずっと具合が悪いようでした。病歴をとりましたが診断がつかず、先輩のメディックに意見を聞きにいきました。

2 日後私たちはその母娘をメソト病院に紹介し、1 週間後彼らはメソト病院から戻りました。スーは医者から娘が先天性の心臓病を患っている事を告げられ、心配し絶望していました。

その子の病気はメソト病院では治療できないため、医師に紹介状を書いてもらいチェンマイのスアンダック病院へ治療を依頼しました。私はメータオクリニックがその病院とつながりがある事と、ビルマ人がチェンマイにいく事はどれだけ難しいかを説明しました。

メータオクリニックはチェンマイへの交通費を用意できるけれど治療が終わるまで家には帰れないと告げるとスーは 3 日間悩んで、娘のために時間を使うことを約束しました。

そこで私たちはチェンマイの病院の予約をとり、スーは 3 回病院に行きました。現在、スーの娘は治療を完了し元気で幸せそうにしています。

チェンマイについてスーに尋ねると、ビルマとは全然違って、高くてきれいな建物がありとても驚いたと話しました。

「みんなきちんとした身なりをし、丁寧に話し、とても優しかった。先生も看護師さんも仲がよく、患者さんをよく世話していました。そしてお金の事は一切口にしなかった。」

スーは患者の家（訳注：チェンマイの病院で治療を受けるビルマ人のために NGO が用意した宿泊施設）で生活する間、料理や掃除を手伝いました。

当初スーは、チェンマイに行った事がなく、タイ語を話すこともできなかったため怖がっていました。しかし私は通訳がいることを説明しました。

現在、スーの娘は 1 歳と 8 ヶ月。活発で、お絵かきとテレビを見る事、みんなと遊ぶ事が好きです。

スーは、娘の命を救ってくれたすべての人に感謝しています。お医者さんと看護師さんに会えるように手配をしてくれたメータオクリニックのスタッフ。自分たちのようなビルマ人を救ってくれている寄付者の人たち。一生忘れないと言います。娘が将来、教師になってくれる事を願っているそうです。

Everybody has malaria　みんながマラリアに

By 小児外来スーパーバイザー、メイスー

2 週間前、私はイエたちを見て驚きました。8 人の家族全員が病気になっていたからです。

「どうしてもっと早く病院に来なかったの？どうして一度にみんなが病気になったの？」

と尋ねると、イエは病院にくる交通費がなかった、タイの身分証明がないので警察に捕まる事が怖かったと話しました。

家族は力なく熱を出し栄養不良でした。そして身の回りの事を自分たちでできないこと、お金が無い事を心配していました。メディックは家族全員が熱帯熱マラリアに罹っていること、入院してよくなるまで治療を受けること、治療と食事は無料で受けられることを説明しました。

1年前、イエの家族はタイで仕事を探すことに決め、ミャワディの近郊の、国境のビルマ側にあるメータオタレイ村に移住しました。家族は農耕で食費を稼ぎました。イエの夫は日雇いの仕事を見つけ一日 100 バーツ（訳注：約 280 円）を稼いでいましたが 1 月に 20 日しか仕事はありませんでした。家族が暮らすのに稼ぎは十分でなく仕事を探すためにあちらこちらへ移動する事を余儀なくされました。そんな中、家族全員が病気に罹ってしまったのです。

タイ国境に移住する前、家族はカレン州コーカレイ地区に住んでいました。村で小作農家をしていましたが全員の食費も賄えず子どもを学校に行かせてやる事もできず、村へ税金を支払わなくてはなりませんでした。

1 週後、家族は回復しイエはとても幸せでした。しかし家に帰るお金がありません。メディックは交通費を工面してやらなくてはなりませんでした。

Future dream: doctor　将来の夢：ドクター
By 外科病棟臨床スーパーバイザー、ティンティン

ソートゥーは 14 歳のカレン人の男の子で 6 年生です。彼は僕にこんな話をしました。

「僕は高校まで学校に行くことに決めた。高校を卒業できたら医学校に行って医者になりたい。そして家族と地域の人を助けたい。

僕は若いけれどよく働くし分別もある。だから両親の言うことも聞くし、先生の質問にもちゃんと答える。でもある時、僕は不注意で転んで右の足を折ってしまった。両親は僕を病院に連れて行く事ができなかったから僕は村で治療された。病院に行く事はとても難しかった。

足が治って歩けるようになって、学校に行ってもっと勉強することにした。僕は頭がいいし勉強をよくするけれど、貧乏だから学校の先生も校長先生も友達も僕に同情している。

今月、僕は大学の奨学金試験を受けてクラスで一番だった。だから大学に行くための支援者が現れるかもしれない。もし時間があれば、僕はよく働くし時間を上手く使う。アルバイトをして勉強のためのお金を稼ぎ、医者になるまで努力し続ける。

もし医者になったら、ラングーン（訳注：ビルマの前首都ヤンゴンの別名）やパアン（訳注：カレン州都）では働かない。僕はこれまでの事を忘れずに田舎の僕の村で働くつもり。

僕の村の教育と医療は整っていなくて、近くの町まで出る事もとても難しい。だから僕の村では医者が必要なんだ。僕は村で働きながらも、トレーニングを受けた病院の先生や仲間との連絡は続けようと思う。彼らに連絡をして支援金や医療品を集めて、カレン州のジャングルの何百もの村に医療を届けるんだ。」

Goal to be a midwife　助産師の夢 e

By 産科病棟臨床スーパーバイザー、ノータマラー

ミャミャは良い助産師になるという夢があります。そして、自分の村からきた人たちを助けたいと思っています。しかし残念ながら、ミャミャの夢は簡単にはかないません。

2003 年、ミャミャはメータオクリニックに来ました。6 ヶ月のコミュニティヘルスワーカートレーニングを受け、その後産科病棟で働きました。彼女はさらに産科救急のトレーニングコースを受けました。助産師になるという決意の元、努力をしてきたのです。

ミャミャは 26 歳。2 人の姉と 2 人の弟がいます。両親は彼女が 14 歳の時に亡くなりました。父親はマラリアで、母親は高血圧か心筋梗塞でした。彼女は中学までを終えましたが、弟たちは学校へ通えませんでした。彼らはお寺に住み、姉は結婚していました。

ミャミャは結婚 2 年目で男の子を授かりました。お母さん似のかわいらしい子です。彼女の夫は時々お酒を飲みますが、ミャミャは辛抱強く夫を理解しています。

ミャミャはコーヒーが好きです。少し恥ずかしがりやですが、仕事のときは特に、勇気があり、成功する自信があり、よく人を手伝います。ミャミャは人のためになり、家族を幸せにし、自信を持って幸せに生きていきたいと思っています。

彼女の育った村には医療がないため、助産師を目指しました。妊娠と出産、その合併症を知る事は、とても重要です。それを知る事でお母さんと子どもを救えるようになるからです。

今は寺に住む弟たちとはなれて、パオー女性団体とともに暮らしています。女性であるミャミャは弟たちと一緒に暮らせないからです。

彼女は学生の頃､本を読むのが好きで公園で座って時間を過ごしたり､友達とピクニックに行ったりしました。今はタイ語と英語を習いたいと思っています。知識と教育をもっと身に付けたいのです。

Homeless Way　家に帰れない

By 内科外来臨床スーパーバイザー

ジョーミントゥンは 26 歳のビルマ人でバゴーのそばの小さな村の出身です。彼は 2 年前からの病気のために、やせて青白い顔をしています。結核や癌を疑い治療を受けましたがやせ細っていくばかりでした。

時にお腹に鋭い痛みと熱感も感じていました。そういった症状が出ると、全く食べられなくなり、身の回りの事もできなくなりました。

ジョーミントゥンは優しく繊細で、面長の顔で中くらいの背丈です。いつも T シャツとビルマの伝統的なロンジーという腰布を身につけています。

ジョーミントゥンは兄と弟がいます。兄は昨年タイに出稼ぎに行き、弟は両親とともにパゴーに残り、日雇い労働をしています。ジョーミントゥンは 2 年間働けていません。

ジョーミントゥンの兄も彼自身も学校に行けませんでしたが、寺院で 3 年間勉強しました。弟は小学校を終えました。そのため彼らは読み書きができます。

ジョーミントゥンの両親は貧しく子どもを十分に学校にやることができませんでした。彼らは小作農家だった

ために野菜をつくる農地や建物を立てる土地を持っていませんでした。彼らのいつもの食事は、米と野菜と魚ペーストです。魚ペーストはビルマ人やカレン人の、伝統的な栄養価の高い食べ物です。月に数回は魚や鶏肉を食べる事ができました。

ジョーミントゥンはメータオクリニックに来る前に、ビルマの病院に行きました。そこでたくさんのお金を使い治療を受けましたが、改善しませんでした。

近所に住む人からメータオクリニックに行く事を勧められましたが彼にはそのためのお金がありませんでした。それでも諦め切れなかった彼は、母親と話し合い叔母から 40000 チャット（約 4000 円）を借りました。

2011 年 10 月にジョーミントゥンはメータオクリニックに来て 2 週間入院しました。診断はつきませんでしたが、補液と抗生剤の投与で熱は下がり、軟らかいものは食べられるようになりました。

ジョーミントゥンの母親は、退院してもお金がなくてバゴーには戻れないと訴えました。交通費が必要だと。そこで友達の紹介でメーソットの近く、タイの村であるワイカロークで収穫の手伝いをすることになりました。

ジョーミントゥンは元気になったら農民として働き両親を助けたい、もしお金がたまったら、きれいな家と土地を買いたいと言います。早くには結婚しなくてもいいと。しかし彼には先立つものがなく、両親は年をとっていきます。

Story Without Hope　希望はない

By 鍼治療科プログラムマネージャー、ソーローワーセイ

僕はビルマの医療状況の悪さを危惧しています。政府は国民の健康よりも他の事を優先しています。僕はスー氏と鍼治療科で話しました。

私は 47 歳の時、体中に倦怠感を感じたことがありました。数日間一日中ベッドに横になり姪に世話になりましたが一向に改善せず、両手足にふるえが出てきたため、姪が車を借りて病院に連れて行ってくれました。私の住んでいた村は町から 3 マイル離れていて、車の道路はなく遠出をするときだけ車を使っていました。

医者に診察してもらい、私たちは薬を持って帰りました。自宅で薬を飲み、少し回復しましたが相変わらず震えは続きました。私たちは 3 年間病院に通いそのたびに多くの出費をし、ついにお金を使い果たしてしまいました。

私には家族が無かったために、姪が面倒を見てくれました。10 年前、ビルマのマンダレーで妻を腎臓の病気で亡くしました。マンダレーはビルマ第 2 の都市です。

私はマンダレーで妻に出会いました。彼女は元気で心優しい女性でした。私たちはマンダレーで結婚した後、バゴーの近くにある私のふるさとの村に戻ってきました。

私たちはそこで両親が亡くなるまで世話をして、山で竹や木を切り出す仕事をしました。私たちは 6 ヶ月山の中に住みました。そのとき、妻は妊娠していました。

妻はマラリアに罹りました。発病から数週後、私は彼女を村に連れて帰りました。村に着いたとき、彼女は流産し、その後は 2 度と妊娠しませんでした。

妻の回復を待って、私たちはマンダレーにうつりました。その頃政府はイラワディ川の橋建設プロジェクトを手がけていて、私たちは 6 年間このプロジェクトに従事しました。プロジェクトが終わった後は輸送業をしました。砂やセメント、金属、石などを毎日運びました。妻とともにそこに 10 年住みました。

ある日、彼女は腎臓の病気になりました。マンダレーの医者に何度か診せましたが助ける事はできず、たくさんのお金が請求されました。

妻を亡くした後、2 年マンダレーに住み、ふるさとの村に戻りました。4 年間姪と住んでいます。姪は家族がいるので、そちらも世話しなくてはなりません。

村にはタイ・ビルマ国境で農業などの仕事をしている人が多くいて、メータオクリニックでも治療を受けています。彼らは私の状況を見て驚き、メータオクリニックを受診する事を勧めました。

彼らは「メータオクリニックにいくべきだよ、薬代も払わなくていい。」と言いました。私はこれが最後のチャンスと思い、姪と相談しました。姪は交通費を援助してくれて私はようやくメータオクリニックに来ました。

メータオクリニックは私の村から 120 マイルです。そこで内科外来にかかりメディックはまず貧血の治療をしました。メディックは私に「病気はパーキンソン病で、この病気に効く薬は高くて用意できない。でも鍼治療を受けたいのであれば紹介する」と言いました。　私は了承し、鍼治療を受ける事になりました。治療を止めると悪くなるので、メディックは患者寮（訳注：治療中、もしくは治療後の帰宅できない患者のためにメータオクリニック敷地内にある宿泊場）に住まわせてくれています。メータオクリニックに住んでもう 2 年になります。患者寮に住んでいる患者のほとんどは遠くから来ています。私はときどき落ち込み、眠れなくなります。

私は今、食事と食べ物を与えられ幸せです、もしビルマにいたらとっくに死んでいたことでしょう。病気をどうしても治したいです。このような病気を診てくれる病院に行きたいです。私よりもつらい人がたくさんいるので、気持ちを強く持とうと思っています。

病気がよくなれば家に帰り庭師として働きたいです。自分の村が恋しくて、これ以上の希望はありません。